

『鏡山実録』



函架番号 G-214。写本1冊。縦 23.6cm × 横 16.3cm。袋綴。墨付 30丁。1面9行。楮紙。焦茶色無地表紙。外題(左肩・打付け書き)「鏡山実録 一名敵討女豫談」。内題せきしゅうはまたのじやうしゆ つばねまわの「石州濱田城主 并局澤野事」。蔵書印「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」。奥書無。

敵討物の実録である。本作の話には異説が多いとされる(1)。黒川文庫蔵本の梗概は次の通りである。石見国濱田の城主松平周防守の奥方みちに仕えるお道は、急いで御前に参る折、一足あった上草履を何心無く履いてしまうが、それは専横つばねな局沢野のものであった。沢野はお道を罵り、草履を蹴り付ける。翌日、お道はこれを恥じて自害した。お道に仕える下女さつは亡骸に仇討ちを誓い、沢野を連れ出して刺し殺した。屋敷では目付による詮議があり、さつの敵討は認められる。さつはお道の家の養女となり、松尾と改名して周

防守方に召し寄せられ、後には縁付き、その末は繁盛したという。年月については、自害と敵討を享保9年(1724)4月3日のこととしており、詮議の場面には、お道の綴った両親宛の遺書が描かれる。

松平周防守邸での草履打と敵討を素材源とするものとしては、浄瑠璃かがみやまこきょうのにしきえ『加賀見山旧錦絵』(容楊黛作、天明2年(1782)初演)が知られる。また、この実録に根ざして読本おんなかたきうちかたみのふぼこ『女敵討記念文箱』(天明2年刊)が作られたことが明らかにされている(2)。事件について、本島知辰『月堂見聞集』や大田南畝『一話一言』に記録があるが、実録が先行した可能性が指摘されており(3)、実否は不明とされる。

注(1) 平出鏗二郎氏「敵討」、菊池庸介氏「近世実録の研究—成長と展開—」
「主要実録書名一覧稿」。(2) 横山邦治氏「読本の研究」
「展回期の読本」。(3) 中村幸彦氏「中村幸彦著述集」
「近世小説様式史考」「舌耕文学談」。